



『私、能力は平均値でって言ったよね！ リリイのキセキ』書き下ろしショートストーリー
『猫拾った』

王都近郊の草原で、採取のお仕事からの帰り道に可愛い生き物を拾った。

最初は拾っちゃだめかなって思ってた無視して歩いていたのだけれど、ちよこちよことわたしの後をついてくるの。王都門をくぐって、町中に入っても、ずっとついてくる。

振り返ると、「にゃあ」と鳴く。可愛い。すごく。それで、どこまでもついてくるものだから、ついつい連れて帰ってきてしまった。

丸テーブルの中央でのんきに伸びをしている茶虎の子猫を挟んで、わたしは不機嫌なラフィネに懇願した。

「ねえ、飼ってもいいでしょう？」

ラフィネは面倒くさそうに頬杖をついて、いつもの眠そうな半眼で表情を歪めている。

「だあくめ。捨ててきな。あたし、魔物とか動物はムリなの。邪魔だし、めんどいし、うるさい。

そもそも、こちとらリリイを一匹飼ってるだけでも大変なのよ」

ラFINEの中じゃ、魔物と動物とわたしは同列だったの!?

「こんな小さな子猫を王都の外に追い出したら、すぐに魔物に食べられちゃう。それにこの子、わたしやラFINEと同じで家族がいないんだよ。可愛そうだよ」

「別に。まったく。全然」

わあ、素っ気ない。

子猫はといえばラFINEに興味しんしんで、鼻先を彼女の手に近づけてニオイを嗅いでいる。ラFINEが顔をしかめて、片手で子猫をテーブルの中央へと押し戻した。

「いい、リリイ? ここはあたしの家。決めるのは、あんたじゃない。あたし」

「お願い、ラFINE。ちゃんとお世話するからあ。あ、もちろん子猫だけのことじゃないよ? ラFINEのことだって、わたしが頑張ってるもん。立派なおばさんになれるように」

丸テーブルの斜め左側の席についているラFINEの顎が、突然頬杖から滑り落ちた。黙ったまま斜め右側の席に座って様子を眺めていたベイルくんが、ぽつりと漏らす。

「……九歳の子供が二十二歳の女性に向かって言う言葉じゃないな。言うほうも言うほうだけど、言われるほうも言われるほうだ」

ラFINEが両耳を塞ぎ、顔を真っ赤にして叫ぶ。

「うるさいうるさいうるさあ〜い! 何よ、ベイルまで一緒になって! わかった! わかりました! ただし、条件をつけさせてもらおうわよ! 飼い主を捜すこと!」

ラFINEが一度言葉を切って、仏頂面で言い捨てた。

「あなたの言い分だと、この猫に家族を与えてやりたいのよね?」

「うん。家族になるーよ。わたしと、ラFINEと、猫さんで!」

「かつ! 冗談じゃないわ! 里親でも飼い主でも親猫でも何でもいいから、とにかくこいつの引取先を探さない。それが見つかるまでなら置いといていいから。世話はリリイ、あんたが責任持つてすること! いいね?」

わたしは少し考えて、嬉しくなった。だって、それって。

「見つからなかったら、ずっと一緒にいられるってことだよね?」

ベイルくんが呆れたように片手で額を覆って、ラFINEが額に血管を浮かせた。

なんでなんで?

けれどラFINEはすぐに表情を戻して、あきらめたようにつぶやく。

「……まあいいわ。あたしのほうからギルドに親捜しの依頼出しとくから。あんたはせいぜいタイムリミットまでその駄猫と馴れ合いな。そんで情でも移って、いざ返すときに泣き別れるがいいわ。あっははははは!」

それだけを告げるとラFINEは椅子から立ち上がり、つかつか歩いて自分の部屋へと戻っていった。けれども、ドアを閉ざしたと思っただけ開け、顔だけを覗かせる。

「リリイ、今日の晩ご飯は?」

「あ、いまから作るよ。今日はね、オロシソ添えのオークバーグだよ」

聞いた途端、頬の横でパンと両手を合わせてラFINEが花のように笑った。

「わーい、やったあ！ 焼けたら呼んでね。熱々のうちによ？ でも猫はだめ！」
単純。ずっとそうしていれば、とつても美人なのに。

再度、ドアが閉ざされる——直前に彼女を追って部屋にすりりと入っていった子猫の存在に、ラフィネが気づいた様子はない。

十日後、ベイルくんから飼い主が見つかったと報された。なんでも、王都門近くで兵士を相手にレストランを開いているオーナーの、五匹の飼い猫のうちの二匹だったらしい。

ちよつと残念。でも、でも。

わたしは、子猫の脇に両手を入れて抱え上げ、太陽にかざして微笑む。

「よかったねえ。わたしたち三人はみんな本物の家族を失ってきたけれど、君はまだ大丈夫なんだつて。ちゃんと帰れるよ。だから、幸せになつてね」

子猫はわたしを見つめながら髭を下げて、一度だけ大きく「にゃあ」と鳴いた。

ちなみに子猫を返すとき、ラフィネはすすり泣きが聞こえる部屋から一步も出てくることはなかった。

情が移つちやつたみたいで……。

『私、能力は平均値でって言ったよね！ リリイのキセキ』書き下ろしショートストーリー
『俺はただ帰りたいだけ』

リリイと一緒に、スラムの子供たちと採取仕事をした帰り道。王都近郊の草原で、一匹の子猫と遭遇した。

子猫はリリイをいたく気に入ったらしく、どこまでもついてきた。草原を越え、街道を越え、王都門をくぐって平民街を歩き、ついには彼女が間借りしているアルステア家までだ。

「ねえ、飼ってもいいでしょう？」

アルステア家の居間、丸テーブルの上に子猫を置いて、リリイは家主であるラフィネさんに懇願している。一方のラフィネさんは、面倒くさそうに歪めた表情で頬杖をついていた。

「だあゝめ。捨ててきな。あたし、魔物とか動物はムリなの。邪魔だし、めんどいし、うるさい。そもそも、こちとらリリイを一匹飼ってるだけでも大変なのよ」

ずっとこの調子だ。空気が重い。ピリついている。

俺、なんで同席してるんだろう……。こんなことならさっさとスラムに帰るんだった……。

「あの、俺もう帰っても——」

言いかけた俺の言葉を遮って、リリイが悲しげな顔でつぶやいた。

「こんな小さな子猫を王都の外に追い出したら、すぐに魔物に食べられちゃう。それにこの子、わたしやラフィネと同じで家族がいなんだよ。可愛そうだよ」

「別に。まったく。全然」

睨み合っている。テーブル中央で伸びをしている子猫越しに。

だめだ。話を聞いてもらえない。

子猫はといえばラフィネさんに興味が出たようで、鼻先を彼女の手に近づけてニオイを嗅いでいる。ラフィネさんは容赦なく、片手で子猫をテーブルの中央へと押し戻したけど。

「いい、リリイ？ ここはあたしの家。決めるのは、あんたじゃない。あたし」

「お願い、ラフィネ。ちゃんとお世話するからあ。あ、もちろん子猫だけのことじゃないよ？ ラフィネのことだって、わたしが頑張ってるもん。立派なおばさんになれるように」

丸テーブルの斜め右側の席に座るラフィネさんが、突然頬杖を崩した。

前々から気になってはいたのだが、どういうわけかこのアルステア家では九歳のリリイが家事と仕事を一手に行い、二十二歳のラフィネさんは家でだらだらしているだけだ。リリイが楽しそうにしているのが救いだが、かなり異常だとは思う。

俺は思わず、ぼつりと漏らす。

「……九歳の子供が二十二歳の女性に向かって言う言葉じゃないな。言うほうも言うほうだけど、言われるほうも言われるほうだ」

ラFINEさんが両耳を塞ぎ、顔を真っ赤にして俺を睨んだ。

「うるさいうるさいうるさあ〜い！ 何よ、ベイルまで一緒になつて！ わかつた！ わかりました！ ただし、条件をつけさせてもらおうわよ！ 飼い主を捜すこと！ 里親でも飼い主でも親猫でも何でもいいから、とにかくこいつの引取先を探しなさい。それが見つかるまでなら置いといていいから。世話はリリイ、あんたが責任持つてすること！ いいねっ？」

リリイが嬉しそうにテーブルに乗り上げて言った。

「見つからなかったら、ずっと一緒にいられるってことだよねっ？」

その加減無用のポジティブさよ……。

俺は片手で額を覆った。火に油だ。ラFINEさんも顔をしかめている。

「……まあいいわ。あたしのほうからギルドに里親捜しの依頼出しとくから。あんたはせいぜいタイムリミットまでその駄猫と馴れ合いな。そんで情でも移つて、いざ返すときに泣き別れるがいいわ。あつはははははは！」

……なんてことを言うんだ、この大人げない大人は。

高笑いしながら自室に帰る彼女の足下を、子猫がついていったことには気づかなかつたようだ。しかも去り際、チラリとこつちに視線を向けたことから、どうやら依頼出しは俺の役目らしい。というか、現役ハンターは俺だけだから、たぶんラFINEさんの中ではもう依頼は出したことになっているのだろう。

まあ、並外れた魔法能力を持つリリイや、卓越した剣技のラFINEさんの力を度々借りている俺としても、この二人の関係がギクシヤクしているのはあまりよろしくない状況だ。

仕方がない。ここはハンターの俺が一肌脱いで、子猫の引取先を探してやらなければ。

十日ほどで、子猫の身元は判明した。

王都門近くで兵士相手にレストランを開いているオーナーの飼い猫だったらしい。太ったオーナーは相当捜し回り、かなり痩せたそうだ。

きつとリリイもラFINEさんも喜んでくれる。そう思っていた……のだけれど。

いままさに、子猫の引き渡しが行われている。窓の外で。リリイの手によって。

けれど俺の目の前では、自室のベッドに突っ伏して悔しそうに枕を拳で叩きながら泣いているラFINEさんがいた。どうやら情が移ってしまったのはリリイではなく、ラFINEさんのほうだったようだ。

「ああああああ、あたしの猫なのがいい……。誰だか知らないけど、飼い主を見つけたハンターをあたしは絶対に許さないッ、絶対によッ！」

「……?!」

俺は生唾を飲み、黙ったまま逃げるようにその場を立ち去った……。

【END?】